

# 菖蒲沢 A 遺跡

— 平成 6 年度県営圃場整備事業堀地区に伴う  
埋藏文化財緊急発掘調査報告書 —

1995

茅野市教育委員会

SHOUBUZAWA-A SITE

# 菖蒲沢 A 遺跡

— 平成 6 年度県営圃場整備事業堀地区に伴う  
埋 藏 文 化 財 緊 急 発 掘 調 査 報 告 書 —

1995

茅野市教育委員会

# 序 文

菖蒲沢A遺跡はこの度県営圃場整備事業地地区の施行に伴い、記録保存を前提に緊急発掘調査を茅野市教育委員会が実施したものです。

堀地区的圃場整備事業に伴う発掘調査は平成3年度より行われ、数多くの成果がありました。今回発掘しました菖蒲沢A遺跡は南側に位置しています。国指定特別史跡尖石石器時代遺跡や与助尾根遺跡、昨年度発掘しました立石遺跡などの諸遺跡との関連性が注目されていました。その結果、出土遺構は土坑のみの小規模な遺跡でしたが、縄文時代早期前半の土器の出土や、前期の遺構などが発見され、八ヶ岳西南麓での古くからの人間の営みの痕跡をまた一つ明らかにすることができました。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの各関係機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力により発掘調査を無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成7年3月

茅野市教育委員会  
教育長 両角昭二

# 例 言

1. 本書は、平成6年度県営圃場整備事業地地区に伴う、長野県茅野市湖東に所在する菖蒲沢A遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県渾訪地方事務所よりの委託金と、文化財国庫補助並びに県費補助金を得て、茅野市教育委員会が平成6年度に実施した。調査の組織等の名簿は第I章第2節4として記載してある。
3. 発掘調査は平成6年11月4日から12月20日まで行い、出土品の整理及び報告書の作成は平成6年12月から平成7年3月まで茅野市文化財調査室に於いて行った。
4. 発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆は第I章第2節2・4に記してある。
5. 調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第VII系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
6. 本報告に係わる出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財調査室で収蔵・保管されている。

# 目 次

## 序 文

## 例 言

第I章 発掘調査の概要.....	1	第III章 発掘された遺構と遺物.....	6
第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	1	第1節 遺構の層序.....	6
第2節 調査の方法と経過.....	1	第2節 発掘された遺構.....	7
第II章 遺跡の概観.....	3	第3節 出土した遺物.....	11
第1節 周辺の遺跡.....	3	第V章 まとめ.....	13
第2節 遺跡の立地と地理的環境.....	4	図版・抄録	

# 第Ⅰ章 発掘調査の概要

## 第1節 発掘調査に至るまでの経過

本遺跡の保護については、平成5年9月30日の県営圃場整備事業に係る保護協議において平成6年度の同事業の実施に先立ち、遺跡の範囲及び遺構の状況等を把握するための試掘調査を実施し、その上で再度保護協議を行い、保護措置を講ずることになった。試掘調査は平成5年12月15日から17日まで実施され、その結果遺構は北側の尾根の先端から中央部分にかけてとその南側の尾根の根元の部分で検出された。なお、北側の尾根の全域より縄文時代の土器片と黒曜石片が採取されている。

再協議は平成6年1月18日に開催され、その結果、平成6年度には事業地内にかかる北側の尾根で現在の道路敷より北側の約1,250m<sup>2</sup>を対象に発掘調査し、記録保存を図ることとなった。この協議結果については平成6年2月14日付5教文第7-12-55号「平成6年度圃場整備事業茅野市堀地区にかかる埋蔵文化財の保護について（通知）」で長野県教育委員会より通知され、事業費3,000,000円（農政負担2,640,000円・文化財負担360,000円）で発掘調査を行うことになった。

## 第2節 調査の方法と経過

### 1. 調査区の設定と発掘調査の経過

試掘トレンチにより確認できた遺構の広がる部分に調査区を設定した。表土の除去は重機を用いて行い、最終的に1,380m<sup>2</sup>を発掘調査した。

発掘区内のグリッド設定については、公共座標x=1,705、y=-24,000を基準軸とし、この交点より5mピッチで基本杭を設けた。ベンチマークは1,044.339mを設定した。

遺構確認調査により、遺構は尾根中央部を走る道路敷沿に散在する土坑と、尾根が北側に急傾斜する地形の肩部から2基の土坑が確認された。また、土器片はわずかな量が出土しているにすぎないが、それらの中に尾根の肩部に集中して出土したものがある。センターによる地形測量は1m間隔を基本として行った。

### 2. 遺物整理と報告書の作成

遺物整理及び報告書の作成は、発掘調査の終了した12月より開始した。地形測量については図化を委託した。報告書の作成は柳川英司が行った。本遺跡は平成7年度に道路敷の南側及び南側に位置する別の尾根の発掘調査を予定しているため、今年度は菖蒲沢A遺跡の第一報という形になり、総合的な考察は次年度に継続して行っていく必要がある。

### 3. 調査日誌（抄）

11月1日	表土剥ぎ、及び遺構確認を始める。調査区の南側は尾根の背中の部分に当り、この付近のロームは軟質でバサバサしている。北側は斜面になっており、土壤はシルトになっている。調査区北側の土は水気を多く含み重い。調査区の東部より土坑1基とローム・マウンド1基を確認す	る。
11月2日	発掘作業器材の搬入を始める。	
11月4日	表土剥ぎを終える。土坑4基、集石1基を確認。集石付近より黒曜石の剝片を検出。他に北側斜面で黒曜石の剝片を検出。斜面に抜根と思われる黒い落ち込みを確認する。	

11月7日	土坑4基を確認。調査区の最西端に黒曜石片が散布して出土している。他に早期の押型文土器を遺構外で検出した。	11月28日	搅乱と思われる楕円形の穴を掘り下げていたところ焼石を検出す。更に掘り進めると黒色土が現れて土坑と認められた。
11月9日	遺構確認と土層観察を行う。遺構確認は西側の落ち込み及び南側の道路際の土手で行う。西側では黒曜石の破片と縄文時代後期の土器の破片が出土した。土層観察は東南隅1ヶ所の層序を記録する。	11月30日	28日に発掘した土坑を17号土坑とする。また、集石1とした遺構は土坑となり、20号土坑とする。
11月15日	寒さがとても厳しく、図面を取る手が千切れそうだった。遺構確認を続ける。	12月2日	これまで住居址ではないかと考えてきた、西側の遺構は精査の結果住居址にはならないことが判明する。
11月16日	15号土坑までの半截を行い、14号土坑まで完掘をする。14号土坑は当初住居址の一部と考えていたが周溝が見られず、住居址のプランも検出できないので、土坑とした。しかしこの土坑とくらべて黒曜石を多く出土する。	12月5日	一日中雪が舞い、終日非常に寒い。図面を取るのが困難なほどである。
11月24日	23日に八ヶ岳に雪が降り、現場にも本格的に霜柱が立つようになった。	12月16日	遺構全体の写真撮影を行うために遺構の清掃を行う。前日に雪が降ったため、雪かきから始める。撮影を開始したのは午後であった。
		12月20日	最後の撤収作業を行い発掘作業を終了する。

#### 4. 調査組織

調査主体者	両角昭二 (茅野市教育委員会教育長)
事務局	宮下安雄 (茅野市教育委員会教育次長) 両角美行 (茅野市教育委員会文化財調査室室長) 鵜飼幸雄 (茅野市教育委員会文化財調査室係長)
	大谷勝己 (茅野市教育委員会文化財調査室指導技師) 大月三千代 (茅野市教育委員会文化財調査室主事補)
調査担当	守矢昌文 (茅野市教育委員会文化財調査室主任) 小林深志 (茅野市教育委員会文化財調査室指導主事) 功刀 司 (茅野市教育委員会文化財調査室主事) 小池岳史 (茅野市教育委員会文化財調査室主事) 百瀬一郎 (茅野市教育委員会文化財調査室主事) 小林健治 (茅野市教育委員会文化財調査室主事) 柳川英司 (茅野市教育委員会文化財調査室主事) (現場担当、報告書作成)

(発掘調査・整理作業協力者) 赤堀彰子・牛山市弥・太田友子・帯川すみ子・小平ツギ・小平長茂・小平ヤエコ・羅原リカ子・武居八千代・武田ケサコ・田中にせ・堀内淳・柳平年子

基準点測量委託: 株式会社嶺水茅野支店 地形測量図化委託: 株式会社東京航業研究所

発掘期間中、諒訪地方事務所土地改良課並びに諒地区圃場実行委員会には埋蔵文化財に対して深いご理解と絶大なご協力を賜り、発掘調査を円滑に進めることができた。ここに謝意を表し明記したい。

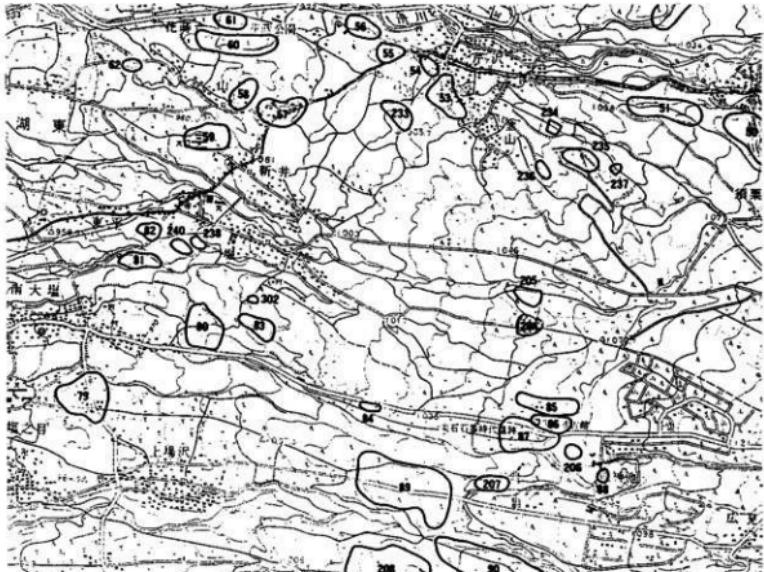
## 第II章 遺跡の概観

### 第1節 周辺の遺跡

菖蒲沢A遺跡（204）の周辺には多くの遺跡が存在している。500m南には与助尾根・与助尾根南・尖石遺跡（85・86・87）があり、この3遺跡では縄文時代早期・前期前葉・中期・平安時代の遺構が現在確認されている。特に中期後葉の遺構が多くみられる。遺跡の分布を見ると楳木より北へ向かって一直線に遺跡が展開し、本遺跡はその北の端ということになる。

西側は1.4~2.4km離れて立石・城・水尻・中ッ原A・B・珍部坂A・B（80・81・82・83・302・238・240）の遺跡があり、いずれも近年の県営圃場整備事業により発掘されている。特に立石遺跡は縄文時代中期後半から後期前半の大規模な集落である。また、立石・城・中ッ原Aには平安時代の住居址が検出されている。

遺跡の北側には菖蒲沢B遺跡（205）が所在する。平成3年に作成された『茅野市遺跡台帳』には縄文中期後半とあるがその実態は不明である。さらにその北側は1.4kmおいて芹ヶ沢地区に至るが、この間は遺跡の空白地帯となっている。本年度の広井出遺跡（236）の調査によれば縄文時代前期前半の住居址が発掘され、縄文時代早期の土器も検出されている。また、この付近には前期前半の神ノ木式土器の標識遺跡である神ノ木遺跡（53）や前期後半の下島式土器の標識遺跡である下島遺跡などがある。神ノ木遺跡では本年度の試掘調査により縄文時代前期の大規模な集落址が確認されている。



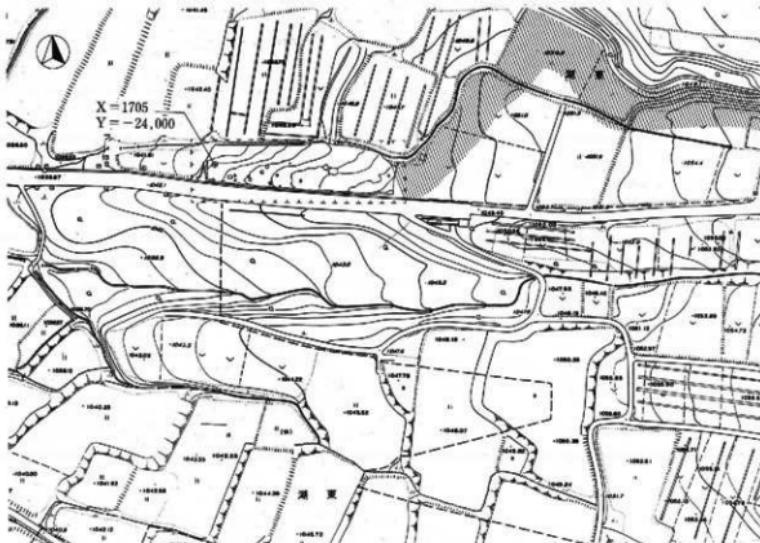
第1図 周辺の遺跡 (1/25,000)

## 第2節 遺跡の立地と地理的環境

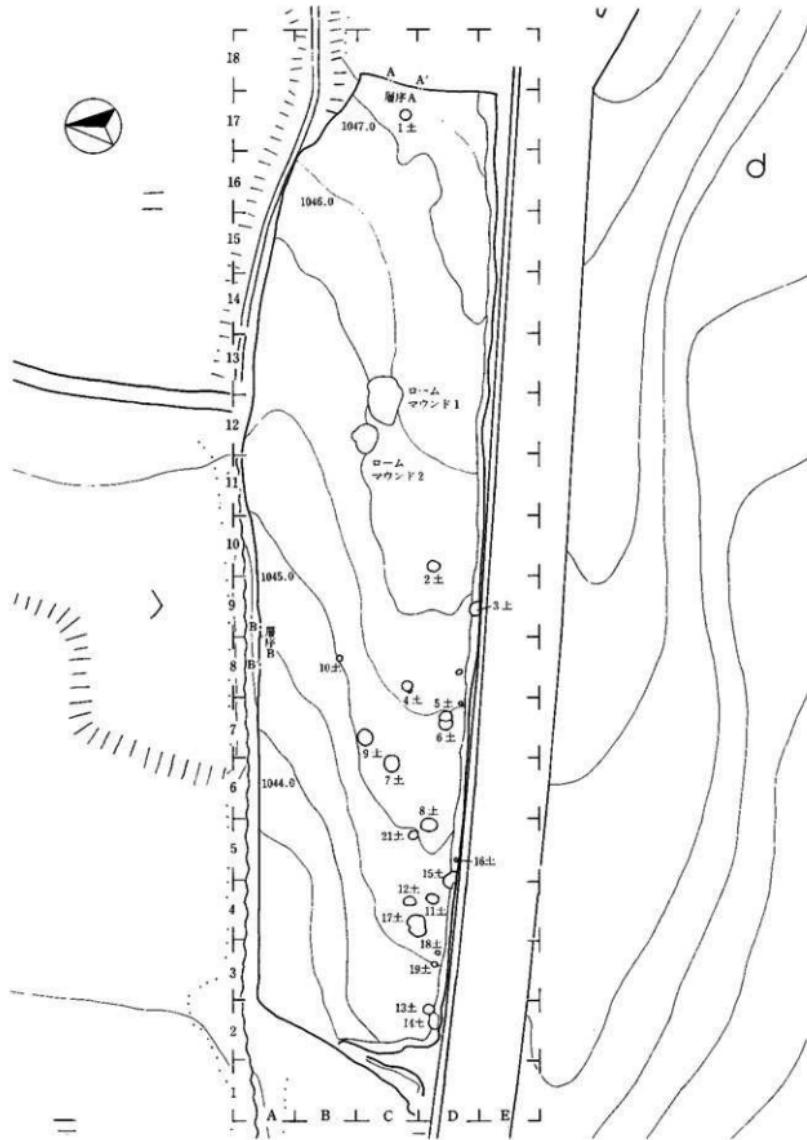
菖蒲沢A遺跡は茅野市湖東堀4,479番地他に位置する。遺跡の南西方向には南大塩区があり、北西方向には堀地区がある。堀地区はJR中央本線から東北東へ約8kmに位置している。遺跡の東側には近年別荘地として開発された三井の森が、さらにその東側に広見地区がある。東側の森の中には南大塩区で記っている「狐之宮」の祠がある。遺跡の周囲の状況は最近の園場整備事業により一変し広大な田地と畑地が広がっている。地元の方の話によると現在の遺跡のある場所は最近開拓したところであり、それまでは松林であったという。発掘中に松の木と思われる根が多く掘り出されたものも領ける。

本遺跡は八ヶ岳の火山活動によってつくられた山麓斜面が小河川の浸蝕によって創出された小規模な尾根状台地に立地している。遺跡の周辺にはこのような手状に伸びる小規模な尾根状台地が広がっており、近隣の与助尾根・尖石遺跡も同様な地形に立地している。菖蒲沢A遺跡は、こうした尾根状台地の背中の部分に展開している小規模な集落であることが考えられ、その主な部分は台地のほぼ中央部を中心に広がっていたのではないかと想定される。今回発掘した区域は尾根の頂を東西方向に走る道路敷の北側であり、菖蒲沢A遺跡全体の約7分の1の1,380m<sup>2</sup>である。

遺跡の占地する尾根の南側の地形はかなりの急傾斜であり、北側も南側ほどではないが急傾面を呈している。北側の尾根の裾下には現在でも使用している沙が流れている。沙に近い場所は湿気がとても強く、土壤がシルトになっており、第3図に示されている地形の北側の等高線にうかがわれるよう、かつては小川などが蛇行して流れていたのではないかと思われる。遺跡の東北側の林の近辺には小規模ながら湿地が広がっていて、古くからの水の供給源の一つではなかったかと推察される。



第2図 菖蒲沢A遺跡の地形と発掘区 (1/2,000)



第3図 萬葉沢A遺跡遺構全体図(1/400)

### 第III章 発掘された遺構と遺物

#### 第1節 遺跡の層序

調査区全体が畠地であり、表土の薄い南側は深耕が進んでいて、土層観察にはいたらなかった。調査区の北側は、擾乱を受けていない土層が厚く残存している。層序を観察した場所は比較的擾乱を受けていない斜面の中央部と、北側の最も低い部分の2ヶ所で観察した。

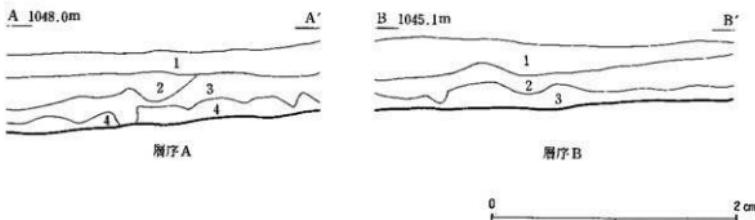
##### 層序A

- 1 暗褐色土 稲作土。乾燥は早く、すぐ白くなる。縮まりはまったくなく、粘性もない。
- 2 暗褐色土 ローム微粒子を少量含み、2mm大のローム粒子と30mm大のロームブロックを少量含み、粘性と縮まりがある。
- 3 晴褐色土 ローム微粒子を多く含み、3mm大以下のローム粒子を少量、30mm大以下のロームブロックを少量含み粘性があり堅く縮まっている。
- 4 暗黄褐色土 ローム微粒子、5mm大以下のローム粒子、20mm大以下のロームブロックを含み、赤色バミス(10mm以下)を稀に含む。粘性があり堅く縮まる。

##### 層序B

- 1 暗褐色土 稲作土。ローム微粒子を多く含み、さらさらした土で縮まりはない。
- 2 暗褐色土 ローム微粒子と1mm大程度のローム粒子を多く含む。縞状に暗黄褐色土を含む。粘性と縮まりがある。
- 3 暗黄褐色土 2層とはほとんど同じであるが、30mm大以下の赤色バミスを多く含む。若干白色土を含んでいる。堅く縮まり粘性がある。

以上のような土層堆積の状況を示している。耕作土の下はAもBも擾乱を受けていない。層序Aでは南側から北側へ自然堆積した様子が看取される。A 4層とB 3層には赤色バミスを含み、特にB 3層の下部辺りから暗黄褐色土に白色で非常に堅硬な土が混入し始める。この白色の上はシルトであると考えられ、かつては川の流路があったことを伺わせる。B 2層の縞状に混入している暗褐色土は、川の流れによって運ばれた堆積物と思われる。



第4図 遺跡の層序 (1/40)

## 第2節 発掘された遺構

今回発掘した箇所では住居址の検出はなかったが、22基の土坑の検出があった。そのほとんどは縄文時代に帰属すると考えられるが、土坑より時期の決定できるような資料の出土はほとんどなかった。また、少數ではあるが近代と考えられるような土坑の出土が見られた。以下にこれらの土坑を述べていきたいと思う。

### 第1号土坑（第5図、図版2）

遺跡の最も東側で出土した。直径92cm、深さ42cmで平面形は円形であり、断面形は盤状で土坑の底面は木の根の搅乱によって荒れている。土層には柱のようなものが立っていたと考えられる。しかし、建物址を想定した場合、この土坑に対応するような土坑は検出されなかった。

### 第2号土坑（第5図、図版2）

長径104cm、短径98cm、深さ48cmで他のものに比べ大形の土坑である。平面形は円形で断面形は盤状である。壁は振り方がしっかりとしていて、底面は平坦である。土坑半截前の土層の平面観察では、中心部にある円形の第1層が堅く締まりのある第2・3層を取り囲まれていた。土坑の底面より30.4cm上位で輝石安山岩の破片が1点出土している。また、底面より18cm上位の第3層中に炭化物の集中箇所があった。

### 第3号土坑（第5図、図版2）

道路造成時に約3分の1程削られた土坑である。推定ではあるが直径136cm、深さ22cmであり、平面形はおそらく円形と考えられ、断面形は桶状を呈す。遺物の出土は見られなかった。

### 第4号土坑（第5図、図版2）

遺構確認時には1基の土坑と考えていたが、土坑半截時に2基の重複とし、北側の土坑をa、南側の土坑をbとした。b土坑がa土坑を切っている。a土坑は2号土坑と類似した土坑であり、規模は長径86cm、短径72cm、深さ24cmである。平面形は円形で、断面形は盤状を呈し、底面がしっかりとしている。b土坑は直径は推定42cm、深さ8cm、平面形は円形で断面形は皿状である。a土坑より振り方が浅く、底面もはっきりしていない。遺物はa土坑より安山岩の礫が底面より18cm上位で1点出土している。

### 第5、6号土坑（第5図、図版2）

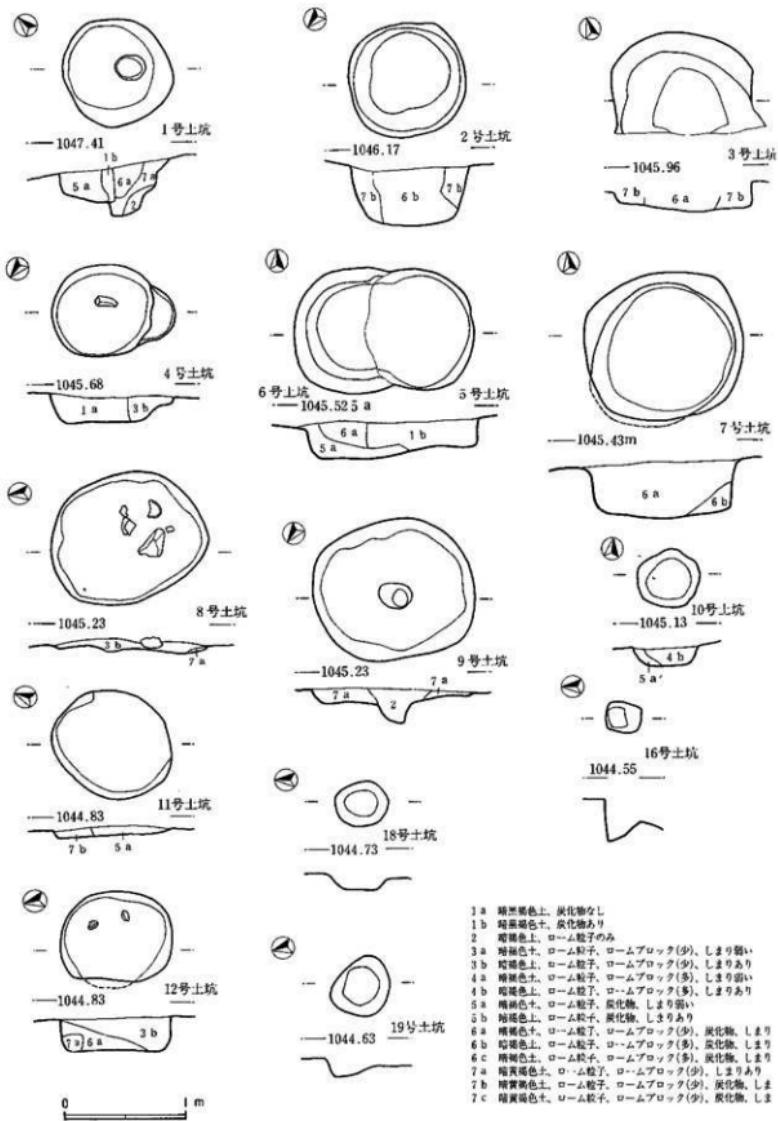
円形の土坑が重複し、8の字形を呈している。5号土坑が6号土坑を切っているわけであるが、5号土坑の土層であると考えられる1、2層が黒色土であり、壁の振り方も縄文時代のものと比べると垂直に底面まで降りていて凹凸がないため、近代の土坑であると判断した。5号土坑は推定ではあるが直径100cm、深さ22cmで断面形は盤状である。6号土坑は2・4号土坑と同様の土坑であり、長径108cm、短径98cm、深さ32cm、断面形は盤状、底面より6.3cm上位で安山岩の礫が出土している。

### 第7号土坑（第5図、図版2）

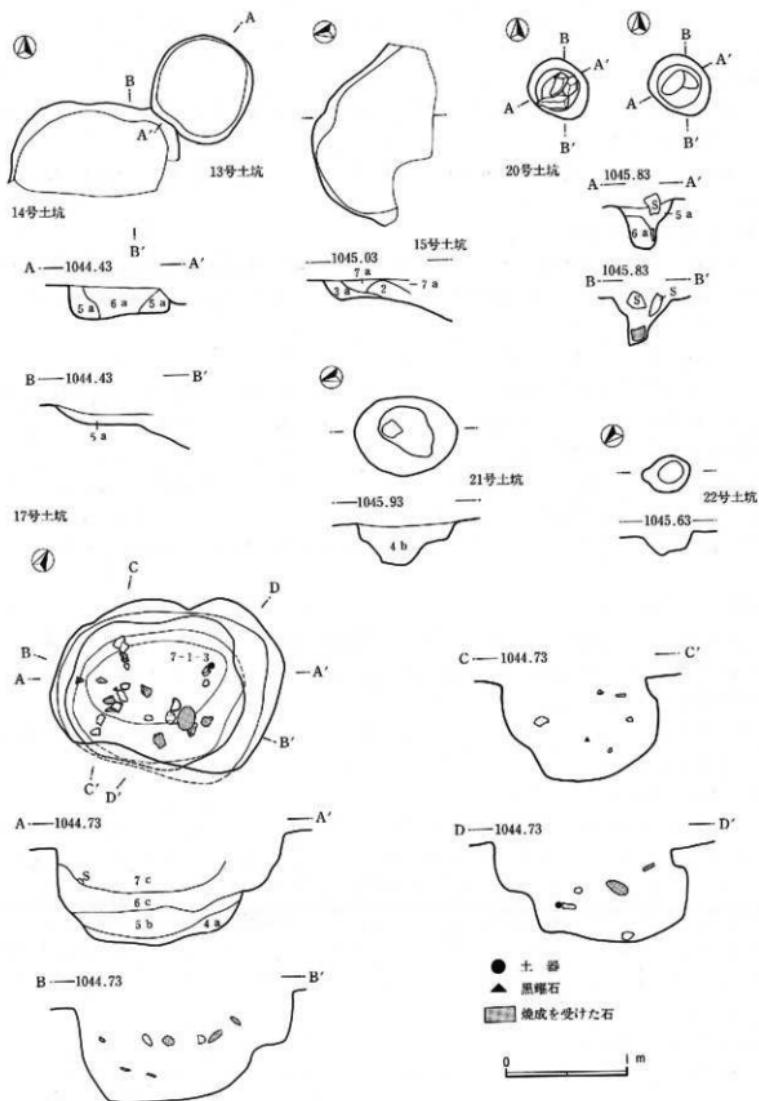
長径は136cm、短径134cm、深さ46cm、平面形が円形であり、断面形は袋状である。土層は2層に分層できる。三角堆積土は袋状土坑の縁がなんらかの理由で、欠け落ちたものと思われる。

### 第8号土坑（第5図、図版3）

今回の発掘では唯一まとまった遺物が出土した遺構である。規模は長径128cm、短径100cm、深さ12cm。平面形は桶円形で断面形は皿状を呈す。確認面より見てもかなり浅い土坑である。底面は木の根の搅乱もあってか、かなり凹凸がある。出土遺物は安山岩の礫1点と、縄文時代前期前半（第7図1-7）の土器が1個体分出土している。遺物は共に底面付近より出土している。



第5図 検出された遺構 (1) (1/40)



第6図 検出された遺構 (2) (1/40)

#### 第9号土坑（第5図、図版3）

長径130cm、短径112cm、深さ12cm、平面形は橢円形で断面形は皿状である。底面は凹凸がある。土坑中央に直径28cm、深さ18cm（9号土坑の底面より）の凹みがある。この凹みの底面は平坦ではない。

#### 第10号土坑（第5図、図版3）

長径36cm、短径32cm、深さ10cmの小形の土坑で、平面形は円形、断面形は盤状である。底面は平坦である。

#### 第11号土坑（第5図、図版3）

長径96cm、短径88cm、深さ8cmで9号土坑に形状が類似している。平面形は橢円形で、断面形は皿状である。

#### 第12号土坑（第5図、図版3）

長径90cm、短径74cm、深さ26cmの比較的大きな土坑である。平面形は橢円形で断面形は盤状。底面から24.9cmと5.9cm上位の覆土中から安山岩の礫が出土している。このうち高い位置から出土した礫は焼成を受けたためか赤色化している。

#### 第13号土坑（第6図、図版3）

長径は92cm、短径82cm、深さは26cmで、平面形は円形で、断面形は盤状。南西側の第2層中に微量ではあるが焼土が認められた。底面より19.7cmと19.4cmの位置で黒耀石の剝片と安山岩を検出している。

#### 第14号土坑（第6図、図版3・4）

土坑の約3分の1が道路によって切られている。長径は推定140cm、深さは16cmと浅く、平面形は橢円形と考えられ、断面形は皿状を呈す。この土坑の周辺からは遺物が多く出土している。それらは黒耀石片数片と縄文時代前期末（第7図1-4）の土器である。僅かではあるが13号土坑が14号土坑を切って構築されている。

#### 第15号土坑（第6図、図版4）

土坑の約3分の1が道路によって切られている。長径は推定156cm、深さ14cm、平面形は円形で、断面は盤状である。底面は木の根の搅乱などにより荒れているが、もとは平坦であったと考えられる。

#### 第16号土坑（第5図、図版4）

直径32cm、深さ34cmのピット状の土坑で壁が垂直に掘られたものである。第5号土坑と同じく近代のものと思われる。

#### 第17号土坑（第5図、図版4）

長径192cm、短径144cm、深さ86cmの平面形は長楕円形の土坑である。この土坑は一度土坑を作った後、最初の土坑より浅い部分に土坑を作ったことが考えられ、これは断面形を見るとよく判る。第1・2層は後から作られた土坑であり、最初に作られた土坑の上部を破壊して作られている。断面形を見ると第3層以下は袋形になっており、最初の土坑は袋形に作られていたことが判る。出土遺物は礫が多く出土しており、そのほとんどは第1層中より検出している。礫の中には焼成を受けて、一部焼けたものと、全体が焼成し真っ赤なものとがある。礫はいずれも安山岩である。第2層中より縄文前期後半（第7図1-3）の土器が出土している。

#### 第18、19号土坑（第5図、図版4）

18号土坑は長径44cm、短径36cm、深さ12cm、19号土坑は直径25cm、深さ14cmとともにピット状の土坑である。

#### 第20号土坑（第6図、図版4）

長径54cm、短径46cm、深さ33cmでピット状の土坑である。土坑の南東側には大形の礫が4個検出されている。この礫の中には焼成をうけたものもある。

#### 第21号土坑（第6図、図版5）

長径85cm、短径65cm、深さ33cmの平面形が楕円形で、断面形が不整形の土坑である。

#### 第22号土坑（第6図、図版6）

長径33cm、深さ15cmのピット状の土坑である。

### 第3節 検出された遺物

本遺跡出土の遺物はそれ程多くなく、時期が決定できるような資料は第7図に図示した7点しかない。この7点もほとんどが遺構外で検出したものである。土器はいずれも縄文時代のものであるが早期、前期前半、前期後半、後期前半とははだバラエティーにとんでいる。

まず、早期は2点出土している。ともに遺構外の出土で1と2が確認された。1は山形の押型文、2は椭円の押型文である。ともに早期前半に比定される土器である。

前期は第8号土坑から出土したのが7で、口縁部分が開き底部に近付くほど窄まっていき、胎土には雲母を多く含む。輪積み痕が明確に残り、不明瞭ながら土器の内外面に指頭压痕がみられ、施文された形跡は認められない。また、纖維質のものを胎土に含まないことから、前期前半の中越式の土器であろう。

前期後半の土器は第17号土坑の第3層中より3が出土し、沈線が1~4mm間隔で走り、一部ボタン状突起が剥落したような痕跡が見られるところから諸磯式土器ではないかと考えられる。第14号土坑からは、ソーメン状浮縄文が口縁部に施された4を検出した。十三菩提式土器と考えられる。

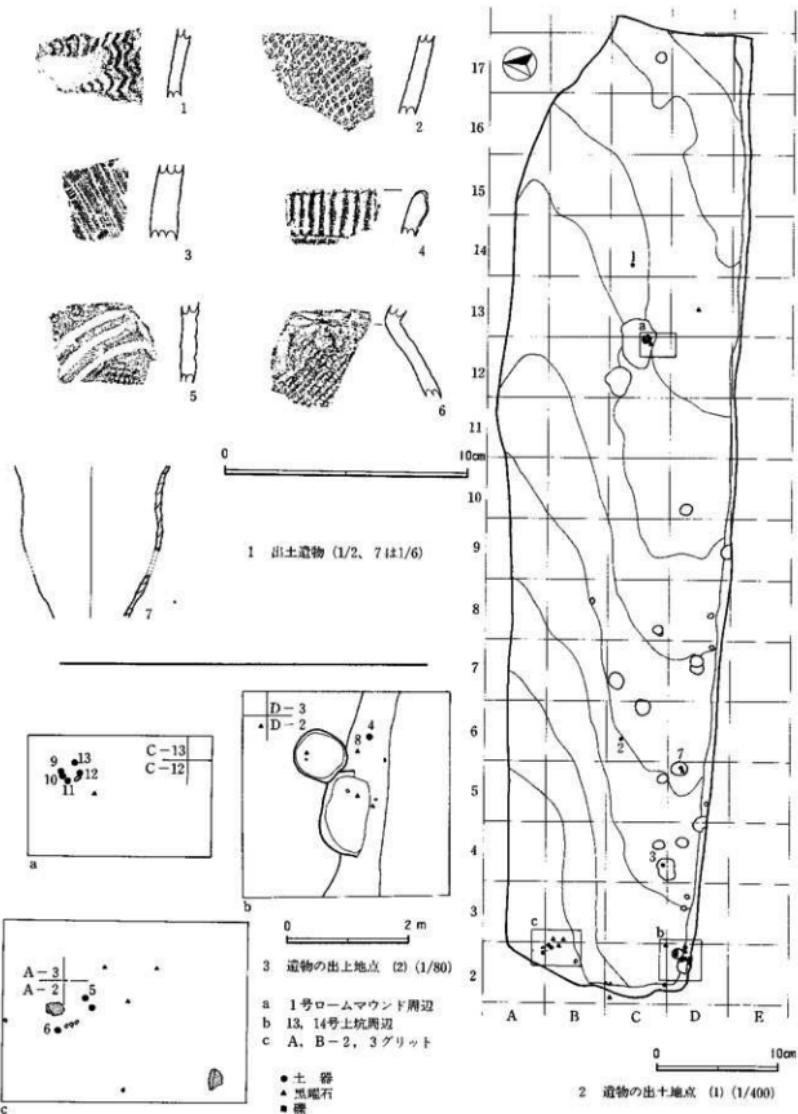
後期は5と6の2点出土している。5は渦巻文の一部と思われる太い沈線と縄文からなっている。6は頸部から口縁部に向かって朝顔状に開く土器の頸部で頸部のすぐ下の部分に縄文が施文されている。出土地点はともにA、B-2グリットから出土し、後期前半の壙之内Ⅰ式段階の土器と考えられる。

図示はできなかったが第7図3aの9~13の土器片は同一個体である。胎土に微量の纖維を含み、長石の粒子が全体に見られるが、雲母を含んでいない。胎土は特別脆いというわけではなく、意外にしっかりしている。色調は茶褐色で無文である。縄文時代の土器ではあるが、細かい時期は不明である。

石器については成品と呼べるものは出土していない。しかし、遺跡の2ヶ所で集中的に黒曜石を検出し、黒曜石成品の作成になんらかの係わりがあったと考えられる。

1ヶ所はA、B-2、3グリットで、前述の後期の土器のほかに30cm大の焼石が2点とその周囲より数点の黒曜石片が確認されている（第7図3c）。黒曜石はすべて碎片で、成品と呼べるものはないため、図示していない。この場所は烟への進入路によって攪乱を受けているが、比較的大きな焼石が出土しているところから、後期のなんらかの遺構があったのではないだろうか。

もう1ヶ所は第14号土坑周辺である（第7図3b）。8は未完成の石錐と考えられ、作成途中で先端が欠けてしまったために廃棄されたのではないかと思われる。8が検出された地点の周辺からは同じ黒曜石から取ったのではないかと思われる碎片が數片見られる。石核から8を作成したときに出た剝片であろう。8の出土した地点のすぐ側から4が出土しているところから、8は前期末の石錐の未完成である可能性が強い。



第7図 検出された遺物と出土地点

## 第V章 まとめ

菖蒲沢A遺跡の今回の発掘では土坑22基を検出したのみであるが、地元の方の話によると尾根状台地の中央部に道路を作ったときに、第14号土坑付近で石匂炉がみつかっているという。この石匂炉は当然住居址に伴うものであると考えられる。平成3年作成の『茅野市遺跡台帳』には縄文時代中期後半の曾利IV式土器の出土が記されているが、この土器も道路建設時に発見されたものであり、その状況からも埋甕であったと考えられる土器がある。したがって、今回の発掘で縄文中期に該当する遺構は検出されなかったが、中期後半の住居址が埋藏されていたことは確かであろうと思われ、今回発見された土坑の中には中期後半の住居址付近に作られたものもあったとみてよかろう。以下これらの土坑について簡単ながら分類を試みてみた。縄文時代と考えられる土坑のうちすべての土坑を分類することはできなかったが、次の5種類に分類することが可能である。

1類 8・11号土坑のように皿状で底面がはっきりしない土坑。土坑の形態と遺物の出土状況をみると、昨年度発掘された縄文中期初頭の遺跡である碑田頭C遺跡や中期後半から後期前半にかけての立石遺跡で設定された円形や楕円形の平面形をもち、土層が單一もしくは自然堆積を示し、土器や礫が出土するという墓壙の形態によく似ているといえる（守矢1994・小池1994）。本遺跡の8号土坑では、出土した土器は前期前半の中越式であるところから中・後期の遺跡と同列に考えて良いかは躊躇するところである。だが、ほかの土坑の用途と比べて考えると非常に浅いと感じられるところから、直感的ながら墓壙であると考えても良いのではないだろうか。11号土坑からは遺物が出土していないが、形態から同じ性格の土坑と考えておきたい。

2類 7・12号土坑のように土層が自然堆積を示す断面形が袋状の土坑。2類は平面形が円形のものが多いが、17号土坑下部のように平面形が長楕円形のものもある。従来このような袋状の土坑は貯蔵穴であるといわれている。本遺跡では貯蔵穴であるといえるような遺物の出土はなかったが、しっかりとした掘り方と袋状の断面形、そしてかなりの深さを有するところから貯蔵穴と考えられる。時期については、13号土坑が十三苦提式期の14号土坑を切っている点と、17号土坑下部より諸磧C式期の土器が出土しているところから、縄文前期後半の貯蔵穴であることがいえる。

3類 17号土坑上部に見られるように平面形が長楕円形で断面形が皿状で多くの焼石を含む土坑。17号土坑は前述のように下部より縄文前期の諸磧C式期の土器が検出された。上部の土坑は下部の土坑との切り合いをみるとほぼ重なる形で作られているため、下部の土坑が廃棄されない段階で上部の土坑が作られたのではないかと思われる。この17号土坑に非常に似た土坑が岡谷市の扇平遺跡にもみられる。扇平遺跡の254号土坑はやはり最初に作られた土坑の上に焼石を多く含んだ自然礫と炭化物を含んだ土坑があり、押型文土器と下島式土器が焼石の間に発見された。長崎元広氏によると「下部の小竪穴の上に屋外炉の作られた転用例もあった」（長崎1974）とあり、上部の土坑が屋外炉であるという用途を示している。扇平254号土坑は上部の土坑より多くの炭化物が検出されているが、17号土坑上部からは少量の炭化物しか検出されていない。しかし、焼石を多く含んでいるところにより、屋外炉ではないとは言い切れない。また、扇平254号下部の土坑は土層をみるとかつては袋状土坑であったという可能性があり、この2つの土坑の重複関係が偶然の一致なのか今後類例を広く集め検討しなければならない。

4類 1～3・9・13号土坑のように覆土の土層が中心部とその両脇に分かれる2層で、平面形が円形で断面形が盤状を呈する土坑。土層観察によると柱痕と考えられる土層が土坑の中心部に見られる。これらの土坑

は分布がまちまちであり、対応すると考えられる土坑はそれぞれに見出すことはできず、住居址や建物址に関わる土坑ではないと考えられる。このような土坑が出土した遺跡として、同じ割地内にある立石遺跡がある。立石遺跡では「環状を呈するB墓坑群の一部を構成する柱穴と考えられる。ここには、トーテムポール様の柱が建てられていたのかかもしれない。」(小池1994)とあり、これらの土坑の時期を中期末から後期前半としている。本遺跡の土坑からはその時期を示すような遺物の出土は無く、墓壙と考えられるものも前期前半のものしかない。後期の遺構としては遺跡北西部出土の焼石周辺が何らかの遺構であると推定できるのみであり、果たしてこれらの土坑が立石遺跡と同じ時期で同じ用途であったかどうかは不明である。

5類 10・18~20・22号土坑の所謂ピット状の土坑。これらの土坑は南側の道路際に主に分布しており、対応する柱穴は現在の道路敷のある場所にあったと考えられる。この中で20号土坑が特徴的で、大型の礫が南側に固まって検出されたところから、北側に柱を立てその根元を石で押さえたものではないかと考えられる。20号土坑の礫は焼成を受けたものがあるところから、17号土坑上部の焼石に何等かの関わりがあるのではないかと考えられる。

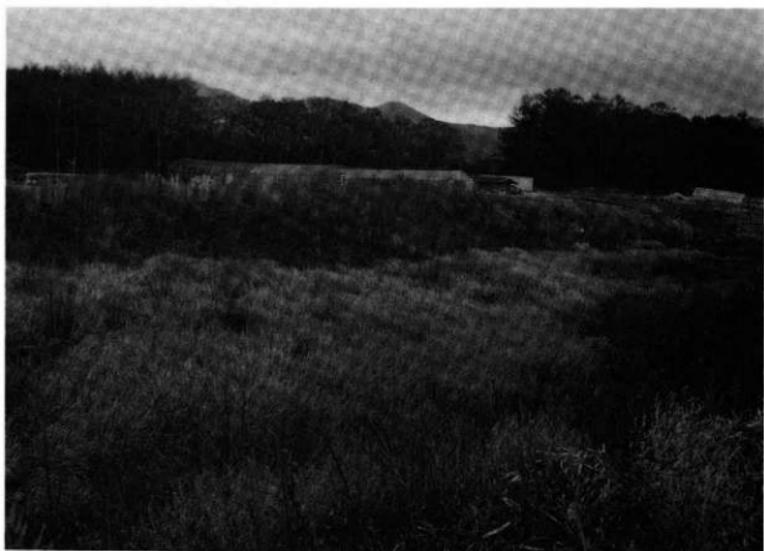
土坑の分類からは、時期ごとに土坑の用途が異なっていることが判かった。菖蒲沢A遺跡では縄文時代前期前半が墓壙と考えられる土坑で、その次に人々がこの地に来たのは諸磯C式期や十三苦提式期になってからであり、貯蔵穴を作り、屋外炉で調理した。貯蔵穴の存在により、ある程度はここに止まって生活した人がいたのかもしれない。その後中期にはいってからは、今まで発見されている遺構・遺物から、中期後半の時期にごく小さな集落が當まれたと考えられるが、その実態は明らかでない。その次の後期前半の期I式期にも遺構がみられ、ある程度人が定住した痕跡も認められる。

遺構は伴っていないが縄文時代早期の土器もみられる。八ヶ岳西南麓においては点々と遺構を伴わず、押型文が出土するケースが多くあり、近隣の与助尾根遺跡でも押型文の土器が出土している。また、前期前半の遺跡としては、与助尾根南遺跡があげられる。与助尾根南5号住居址からは中越式系の土器と神ノ木式土器が出土しており、距離的にも近い菖蒲沢A遺跡の墓壙と関連が想定できる。前期末については芹ヶ沢地区に下島遺跡があり、尖石遺跡周辺の遺跡である竜神平遺跡でも(第1図88)土器が発見されている。後期の遺跡は立石遺跡が中期後半から後期前半までの集落であることが昨年度の調査で判明した。本遺跡と同時期の遺構は住居址1軒と方形柱穴列4基が確認されている。菖蒲沢A遺跡の後期の遺構は、立石遺跡との関連性が十分考えられる。

以上雜駁ながら今回発掘した遺構の性格を述べてきた。本遺跡は現在のところでは縄文時代早期から後期まで断続的に人間が関わってきた遺跡であり、継続的な集落ではない。近隣の集落との関係の上で語っていかなければこの様な小規模な遺跡の性格は明かにできないだろう。今回の報告書では現時点で考えられることをまとめてみた。菖蒲沢A遺跡は来年度も発掘を行う予定になっている。さらに踏み込んだ考察は来年度の発掘を行ってからにしたいと思う。

#### 引用・参考文献

- 長崎元広 1974 「9. 小堅穴の分析とその用途」『扇平遺跡』岡谷市教育委員会  
茅野市史『上巻 原始・古代』1986 茅野市  
『茅野市遺跡台帳』 1991 茅野市教育委員会  
小池岳史 1994 「IV 1. 立石遺跡における穴の性格」「立石遺跡」茅野市教育委員会  
守矢昌文 1994 「第III節 第2節 3. 縄文時代の土坑と他の遺構」「御田頭C遺跡」茅野市教育委員会



1 調査区遠景（南より）



2 調査区全景（西より）

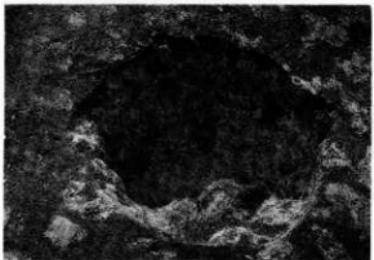
図版－2



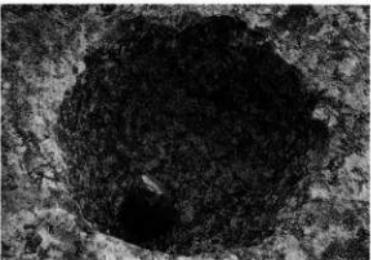
3 層序A（西より）



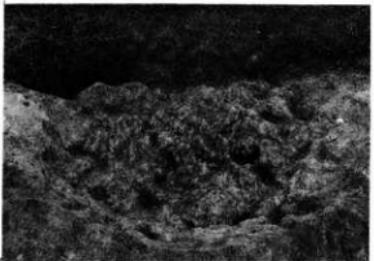
4 層序B（南より）



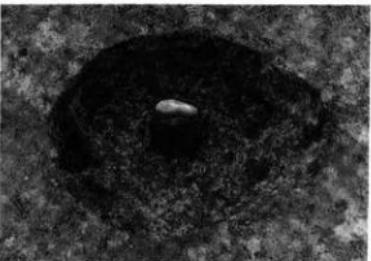
5 1号土坑（北より）



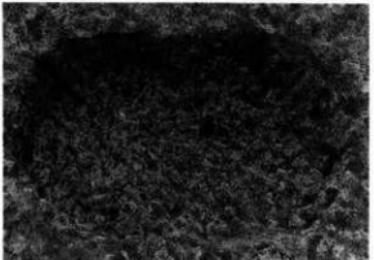
6 2号土坑（北西より）



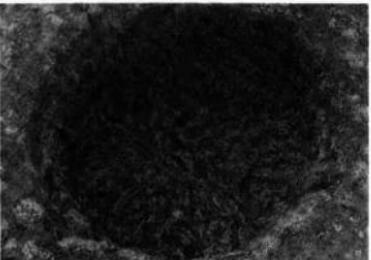
7 3号土坑（北より）



8 4号土坑（北西より）



9 5(左)・6号土坑（北より）



10 7号土坑（北より）



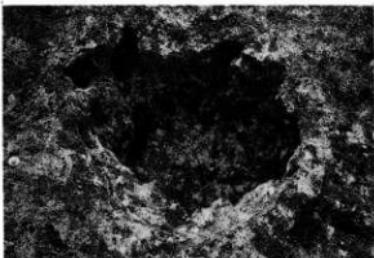
11 8号土坑遺物出土状況（東より）



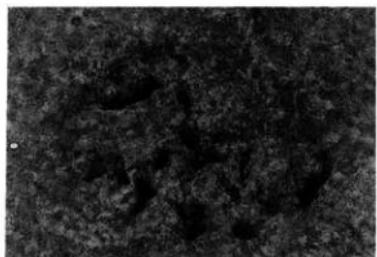
12 8号土坑（東より）



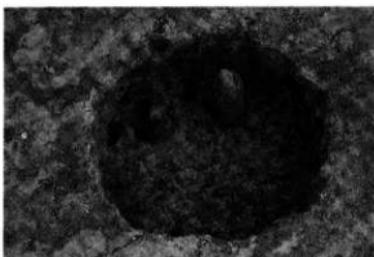
13 9号土坑（北より）



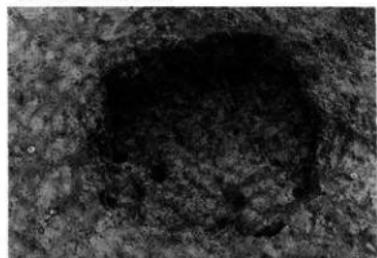
14 10号土坑（北より）



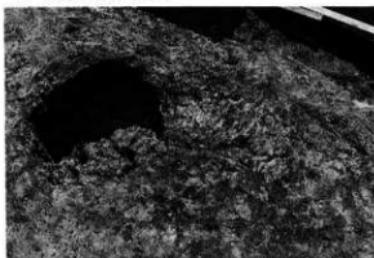
15 11号土坑（西より）



16 12号土坑（西より）

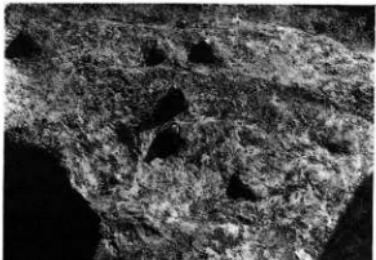


17 13号土坑（北西より）



18 13（左）・14号土坑（北より）

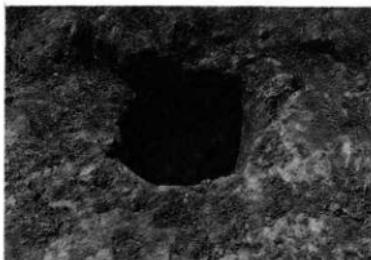
図版－4



19 14号土坑（北より）



20 15号土坑（北より）



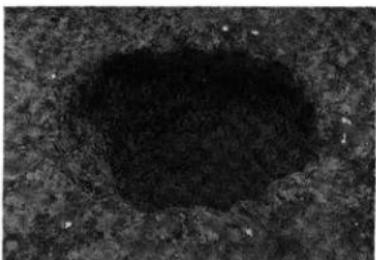
21 16号土坑（北より）



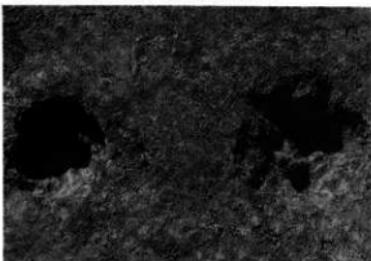
22 17号土坑土層（南より）



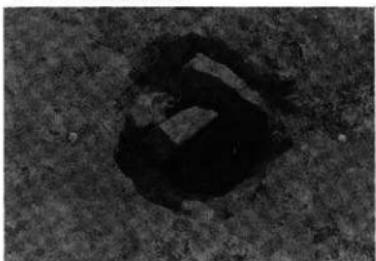
23 17号土坑遺物出土状況（北西より）



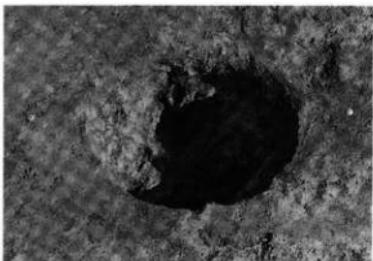
24 17号土坑（北西より）



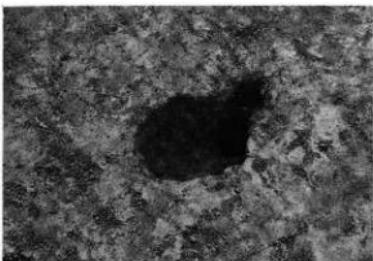
25 18（左）・19号土坑（北より）



26 20号土坑（北より）



27 21号土坑（東より）



28 22号土坑（北東より）



29 A・B-2・3グリッド周辺（東より）



30 発掘作業風景



31 調査区全景（南西より）

図版-6



32 調査区全景（東より）



33 調査区西側（東より）

報告書抄録

ふりがな	しょうぶさわ							
書名	菖蒲沢A							
副書名	平成6年度県営圃場整備事業塙地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柳川英司							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒391 長野県茅野市塙原二丁目6番一号 TEL0266-72-2101							
発行年月日	西暦1995年3月							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
菖蒲沢A	茅野市湖東塙	市町村	遺跡番号	36° 00' 54"	138° 14' 01"	1994.11.01 ~1994.12.20	1,380	県営圃場整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
菖蒲沢A	集落跡	縄文早期 前期 後期 近代	土坑 縄文20基 近代2基	縄文時代 土器 早期押型文 前期前半 前期後半 後期前半 黒蠟石				

---

## 菖蒲沢A遺跡

——平成6年度県営団場整備事業場地区に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書——

平成7年3月10日 印刷  
平成7年3月15日 発行

編集 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号  
発行 茅野市教育委員会  
印刷 はおづき書籍株式会社  
長野県長野市柳原2133-5

---

